

少なくなる 学びと体験の場

愛情を持って子どもを叱ることは、誉めて伸ばすことと同様に大切なこと。しかし今、近所の子を叱ることをタブー視する風潮や、地域活動に参加しない家庭が目立ち、それを受けて、地域の取り組みも縮小しています。現に、地域を挙げた一大イベントの「祭り」が継続できない地域も急増。かつていた、子どもにとっての「近所のこわいおじさん」の姿もみられなくなりましした。子どもたちに「声かけ」「叱る」「諭す」ができる関係にまで至らず、ましてや名前も知らないといった人間関係の希薄さが顕著になっていきます。

しかし、子どもたちにとっての学びは年中無休。目の前が常に成長の場です。学校だけでなく、家庭や地域で過ごす全ての時間をおして社会性を学びます。子どもたちが小さな体験を「生きる力」として獲得していきける地域社会や意図的な体験学習の機会が求められています。

国が初めて 体験の力を実証

子どもたちの体験不足と体験の重要性は広く知られていますが、これまで、その影響に関する実証的な調査はほとんどありませんでした。そのような中、今年10月に発表されたばかりの国立青少年教育振興機構による「体験の力」の調査研究結果は、今後、全国における体験活動の貴重な資料として位置づけられるものです。

研究では、子どもたちの体験が将来どのような効果を与えるのかを調査した結果、体験が多いほど「自尊心」「共感性」「意欲・関心」「規範意識」「人間関係能力」「職業意識」「文化的作法・教養」が高いことが示されました。さらに「最終学歴」「年収」という社会的な地位が高いという結果も、明らかになっています。

報告書では、子どもたちの「生きる力」を大きくむ自然・生活・社会体験の積み重ねと機会や場の充実が大きな課題だと提唱されています。

生きる力を積み重ねる

目の前の すべてが学舎

人は経験からモノを言います。
聞いたことは忘れますが、体験は忘れません。
「生きる力」も体験によって培われます。
子どもたちは自然や社会との関わりから、
より豊かで、生きた知識を得ながら
学ぶ意欲を高めていきます。



通学合宿とは、児童が親元を離れて地域の施設に寝泊りしながら学校に通う福岡県発祥の取り組み。今年、福智町では応募抽選を経た1年から6年までの伊方小児童18人が寝食を共にしました。子ども育成連絡協議会(子育て連)が主体となって、延べ130人のボランティアが見守り、子どもたちは自分と家庭を見つめ直しました。

特色ある体験の場

福智町 今年の体験事業一部紹介



←動植物の宝庫、世界遺産の屋久島で貴重な大自然を体感。(7月21~24日)

夏季少年のバス / 3泊4日 [屋久島]



←沖縄県で平和を学習、民泊交流する中城村が冬季に来町。(8月28~30日)

少年の翼 / 2泊3日 [沖縄]



←上野焼開祖ゆかりの韓国四川省で国際交流。(10月8~10日)

日韓交流 / 2泊3日 [韓国]



←町では見られない銀世界の雪山で、自然の厳しさを体験。(1月29~31日)

冬季少年のバス / 2泊3日 [広島]

かつてのヤマが語るメッセージ

「毎日朝食を食べる」「お手伝いをする」「親子でルールを決める」「あいさつをする」「話す」これらは、家庭でなくむ「生きる力」として、文科省が掲げる項目です。しかし、昔はどれも当たり前のことではなかったでしょうか。

かつての炭鉱の時代、親にとって子どもは生きがいでした。貧困が子どもたちの先生でした。仕事を手強い、労働の厳しさと楽しさを覚え、経験から危険を知り、共同生活で助け合うことのすばらしさと社会の秩序を学びました。わが子のように接し、声を掛け合い、時には叱る。そんな炭鉱の路地で、子どもたちは学校では教わることのない「生きる力」を吸収していきました。今はなき「強いつながり」が、あの路地にありました…。

家庭は教育の出発点。「生きる力」の基礎的な資質や能力は、家庭で培われます。昔は子どもたちが家庭や地域で得ていた「生きる力」を、今は学校でも育成しなければならぬ時代。「学校が悪い」「地域が悪い」と分野を切り離すのではなく、学校・家庭・地域が手を携えなければ立ち行かない状況になっています。



炭鉱の路地

生きるチカラの 小さなカケラ

子どもたちが気づき、感じ、行動することで、自らの殻を破るのが体験学習のねらいです。教えるのではなく、子どもたちが学ぶもの。生きる力を培うのは子ども自身です。「子どもたちに『やりたい』『覚えたい』という気持ちにさせるチャンスが大切。そつと背中を押し、手を差し伸べるのが大人の役目」と、永末さんは事業の経験から、子どもとの距離感を重視しています。

体験学習には成長に合わせた効果的なプログラムがあり、福智町の取り組みもそれを踏まえて対象年齢や内容が設定されています。そこでは、ほんのカケラかもしれませんが、子どもたちが主体的に「生きる力」を手にします。家庭や地域で、そんなカケラが積み重なるような取り組みが増えれば、必ず子どもたちが将来生かせる大きな力になります。やがて経験に基づいた成功は、自信へとつながり、「生きる力」として、人生の礎となっていくのです。

かけがえのない 7日間体験

子どもたちの非日常体験の効果は、上記の研究でも実証されていますが、その点、福智町では特色ある体験事業が活発です。昨年度からは新たに、生きる力の獲得を目指した「通学合宿」がスタート。幅広い学年による6泊7日の体験が、日常では得がたい効果をもたらしています。

通学合宿では生活そのものがプログラム。子どもたちは、調理や掃除、洗濯を自ら行います。日を重ねるごとに自分の個性を出しながら、生活習慣に順応していきました。「かけがえのない体験やつながりから、子どもたちは確かに成長しました。実際に『うちの子が変わった』という声も寄せられています」と実行委員長の永末信一さん(弁城)は、7日間をふり返りました。



福智町交流事業実行委員長 永末 信一 子育て連会長